みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

The People Gathering to the Bear Festival : The Social Principles of the Evenks Reflected in Hunting Rituals

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2010-02-16
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 佐々木, 史郎
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004406

クマ祭に集まる人々

――狩猟儀礼に表出するエヴェンキ族の社会構成原理について――

佐々木史郎*

The People Gathering to the Bear Festival

——The Social Principles of the Evenks Reflected in Hunting Rituals——

Shiro SASAKI

The Evenk is the largest group of Tungus-Manchu-speaking peoples in Siberia. Their bear festival is the so called "mountain-bear festival", a series of rites based on a bear hunted in its den. This paper examines a social aspect of this festival in order to attempt to solve problems concerning their hunting-breeding organization which have not been dealt with by S. M. Shirokogoroff in his studies.

The bear festival of the Evenks is usually held in autumn. It consists of a series of rites of bear hunting, skinning, meat-cooking, feasting, and burial of the bear's bones. There is no qualification for participation, and anyone in a camp or a village, sometimes even forigners, can take part in the feast. Participants can be categorized as a discoverer of the bear den, *nimak* (he is often a wife's brother of the discoverer), hunters, elders, and others. But some rules must be observed by each participant, according to his role in the festival. They often represent rules or principles of hunting-breeding organization among the Evenks.

By examining the rules of each category of participant, the following conclusions were reached:

1) Camps or villages of the Evenks are not formed on clan membership, but on a local or economic basis;

2) Therefore, hunting customs or rules, which regulate hunters-breeders' activities regardless of clan affiliation, are more

* 国立民族学博物館第１研究部

important than clan rules in camps or villages;

3) The structural superiority of the wife-giver group over the wife-taker group sometimes appears as a hunting custom in daily and ritual activities;

4) The leadership in a camp or a village is in hands of elders; and

5) Reflecting these social phenomena, the bear festival of the Evenks is a camp or village festival, and is supposedly connected with locality.

Based on that it is necessary to collect and organize hunting-breeding customs or rules in order to advance Shirokogoroff's studies and to make a more complete model of Evenk society.

Ⅰ. 序　論
Ⅱ. エヴェンキ族のクマ祭
Ⅲ. クマ祭の参加者
1. クマ穴の発見者
2. ニマク
3. 狩人達
4. 長老達
5. 一般の参加者
Ⅳ. 結　論

Ⅰ. 序　論

クマ祭[1)]は，シベリアの森林地帯の他の諸民族の場合と同様に，エヴェンキ族（固有ツングース族）においても最も重要な狩猟儀礼の一つである。エヴェンキ族においてクマに関する儀礼が行なわれていたことは，古くからロシア，西欧の旅行家や民族誌家に知られていたが，それが詳細に記述され，本格的に研究されるようになるのは，意外と最近のことで，1920年代に入ってからである。北バイカル地方のエヴェンキ族（キンディギル氏族 kindigir）のクマ祭の記述がティトフ E.И. Титов によって公にされたのは1923年であり，エニセイ川左岸のスィム地方のエヴェンキ族のクマ祭の記録をルィチコフ К. Рычков が発表したのは1922年である。そして，シロコゴロフ S. M. Shirokogoroff がその主著『北方ツングースの社会構成』(*Social Organization of the Northern Tungus*) において，東方のエヴェンキ族のクマ祭を氏族組織の観点から

1) シベリアでは森林地帯（タイガ）にはヒグマ (brown bear)，北極海沿岸にはホッキョクグマ (polar bear) が棲息するが，このうち，エヴェンキ族が狩猟，儀礼，崇拝の対象としているのはヒグマの方である。以下すべてクマと略称する。

論じたのは1933年であり，エヴェンキ族も含め，シベリアのクマ儀礼を大きく2つの類型に分類し，各々の起源を論じたヴァシーリエフ Б.А. Васильев の「クマ祭」Медвежий праздник が『ソヴィエト民族学』*Советская Этнография* に掲載されるのは1948年である。

エヴェンキ族のクマ祭に関して，現在十分に研究がなされてきたのは，神話，説話などとの関連である。この問題は，長年エヴェンキ族のフォークロアの研究に従事してきたヴァシーリェヴィチ Г.М. Василевич によってかなりの部分が解決されている。そして，エヴェンキの象徴体系の研究も徐々に進み出した。

しかし，他方で，クマ祭をめぐる人々の社会的関係に関する問題は，シロコゴロフ以来，ほとんど進展を見せていない。ヴァシーリェヴィチが有益な資料を残し，また，レーヴィン，ドルギフらがシベリア諸民族の社会構成について正しい示唆を残しながら［Левин и Долгих　1951］，その両者を有機的に結合させて，シロコゴロフの提起した問題に取り組んだ研究者は皆無に等しい。

クマ祭をはじめとする様々な象徴体系を社会構造の観点から説明しようとする研究は，ギリヤーク族（ニヴヒ族）において，高い水準で行なわれている［黒田　1974, 1975; Black　1973］。というのは，ギリヤークについてはシュテルンベルクによって膨大な民族誌的資料が収集，整理されていた上［Штернберг　1933］，レヴィ=ストロースが彼の資料を基礎にして，ギリヤークの社会構造を完全に明るみに出したからである［レヴィ=ストロース　1977: 529–554］。

エヴェンキ族をはじめとするツングース系諸族についても，シロコゴロフの記述を基礎にして，レヴィ=ストロースがその社会構造の解明を試みている。そして，その成果はウイルタ（オロッコ），ウリチなど比較的狭い地域に居住し，しかも人口も少ない民族の社会構造の解明をもたらしている［黒田　1980］。しかし，エヴェンキ族のように，広大な地域に分散し（エヴェンキはシベリアの諸民族の中でも最も分布域の大きな民族である），しかも，社会集団の離合集散の激しい民族の場合は，地域格差が大きく，その時々の，規則に従わない変化が多いため，全体を包含するような構造を見出すことは，きわめて難しい。

本稿では，したがって，エヴェンキ族全体を包含する社会構造を復原するとか，象徴体系を明らかにするとかという大きな問題を扱うわけではない。そうではなく，それらの問題解決のためのささやかな一歩となるべく，クマ祭の過程の中に顕在化している社会的な事象をもとに，エヴェンキ族の集団構成のあり方と親族構造の一部を明らかにすることを目的としている。より具体的に言えば，クマ祭に参加し，その過程

の中で様々な役割を果たす人々を分類，整理して，エヴェンキ族の集落または狩猟遊牧集団の構成と，親族内における母方または妻方親族（すなわち姻族）の役割とについて論じていくわけである。

ただし，考察に入る前に，エヴェンキ族のクマ祭の過程を紹介しておく必要があろう。これは，だれが参加し，彼らがどのような役割を果たすのかを具体的に示すためである。

Ⅱ．エヴェンキ族のクマ祭

エヴェンキ族に関して膨大な資料を収集し，数多くの著作を残したヴァシーリェヴィチによれば，エヴェンキ族のクマ祭は以下の過程で行なわれる [Василевич 1971: 160–165]。

クマ祭で主役となるクマは，そのために行なわれる儀礼的な狩猟によって棲息処のクマ穴で倒されたものが使われる。この種の狩猟は秋に行なわれるのが普通であるが，

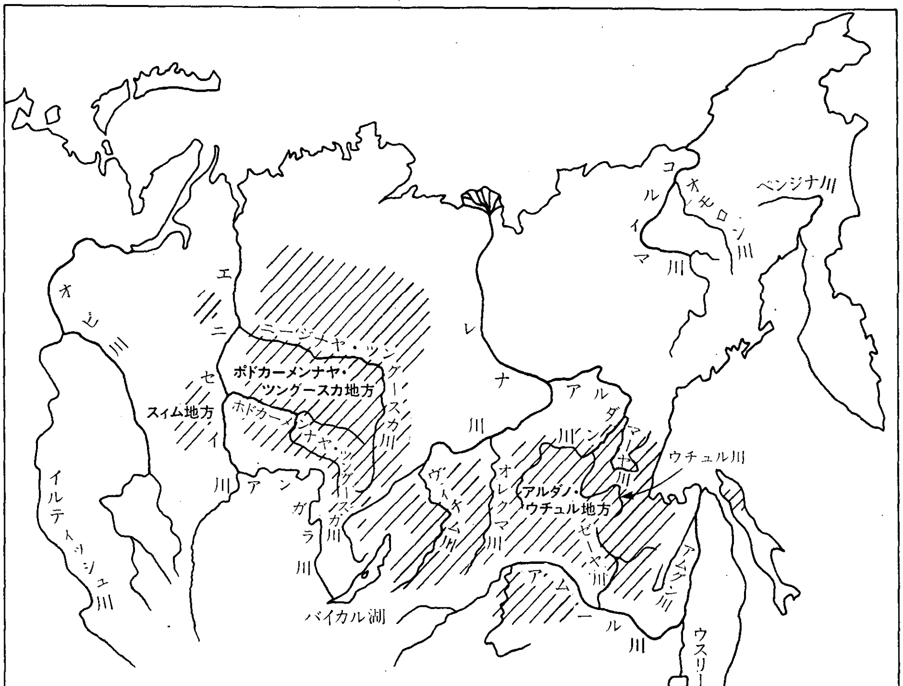


図１　今世紀初頭におけるエヴェンキ族の分布域
（[Василевич 1969: 8] による）

稀に春にも行なわれる。

クマ猟そのものは普段から行なわれているが，クマ祭用の狩猟とは区別され，通常の活動で得られたクマでは，原則的には祭は行なわれなかった。通常のクマ猟は森の中で，クマと遭遇した時点で行なわれ，1人でたち向かうことになる。このような狩でクマを倒した者は，その勇気を讃えられ，永く伝承として語り継がれる場合すらある。

しかし，クマ祭用の儀礼的な狩猟では，まず棲息処であるクマ穴を探し出し，複数の狩人が協力してクマを殺す。この狩で得られたクマはクマ祭の主役となるが，その狩猟活動や狩人達が伝承化されることは決してない。

クマ祭を行なおうとする場合は，まずクマ穴の探査がなされる。そして，発見者はそのことを集落[2]に戻って，自分の姻族の者に報告し，クマを殺す権利を彼に譲渡しなければならない。エヴェンキはこの行為をニマトキン *ниматкин* といい，譲渡された者をニマク～ニメク *нимак～нимэк*[3] と呼ぶ。このニマクは，クマ穴発見者の妻の兄弟がなる場合が多い。彼は，これから，クマの殺害，解体，そして儀礼の中で重要な役割を果たすことになる。

ニマクが決まると，発見者はその同意を得て，自分の槍をニマクに渡し，翌朝，種々の禁忌を守った上で，整列してクマ穴に向かう。禁忌とは，集落内を静粛にしておくこと，残る者は鋭い物を手にしたり，髪をとかしてはならないなどである。

クマ穴に到着すると，狩人たちはワタリガラスの鳴き声を真似し，手を上下に動かして翼を動かす動作をする。それが終わると，ニマクが穴の出口を棒で仕切って，槍を手にしながら，「ヤクート（またはロシア人）がお前を殺しに来た」といって坐る。すると，他の狩人たちが棒をクマ穴にさし込み，クマを追い立てる。クマは穴から躍り出たところで，ニマクが立てておいた槍の上にのし掛かり，自らの重さで槍が胸につき刺さる。時々，これが失敗して槍の柄を破損してしまうこともあるが，その時は

2) エヴェンキ族の集落は季節ごとの活動の違いによって，その規模，構成を変える。トナカイをまとめて放牧し，狩猟漁労活動を分業して行なう夏期には，かなりの数の家族（核家族が諸活動の基本単位である）が集まるが，単独狩猟期となる冬期には2～3家族の集団に分解する。時折，定常的に行動を共にする集団もあるが，夏の比較的規模の大きい集落をはじめ，多くは離合集散の絶えない一時的なものであり，集落の設営場所も季節ごとの活動に応じて，またはその時々の必要に応じて点々と変わる。エヴェンキ語では一時的集落のことをウリキト *урикит*，川岸などに固定的に設営される集落をメネイェン *мэнэен* という（詳しくは[Василевич 1969: 107–109, シロコゴロフ 1941: 586–588] 参照)。ただし，クマ祭に関するヴァシーリェヴィチの記述では，この集落がどういう性質のもので，どの程度の規模になるのかは不明である。

3) 次節で詳しく触れるが，この言葉には異形が多く，地方によって様々な形が使われている。ニマク *нимак*，ニメク *нимэк* はともに代表的な形であるが，本稿ではこれ以後，ニマク *нимак* の方を術語として用いることにする。

素早く木を十字に組んでクマ穴の出入口を塞ぎ，クマが出られないようにしておいて，柄を作り直し，クマが長く苦しんだり，怒ったりしないように，速やかに殺す。

殺してしまうと，再びヤクートやロシア人が殺したのだと弁解し，クマの首に縄をかけて引きずり出し，次のように言う，「おじいさん（おばあさん），静かに出て来て下さい。カーク，キーク」。雌グマの場合は仔グマが穴の中にいる場合があるが，その時は外に持ち出して来てから殺す。

殺されたクマはその場で皮を剝がされ，内臓を取り出されて解体される。クマは木の枝を敷きつめた上に横たえられ，ニマクが次のように言いながら，胸から前足にかけて皮を剝ぎ始める。「おじいさん（おばあさん），毛皮の外套をぬぎましょう。たくさんの蟻がかけよってきて，チクチクやってるんですよ」，または「これはくだらない人間があなたを切っているんですよ」，「おじいさん，ホシガラスがしらみを互いに探し合っている犬のように鳴いていますよ。」

足の皮を剝ぐ時は，足跡を自分たちのものから区別するため，爪と足の裏の皮は残し，さらに腱を切ってしまう。この時狩人は次のようにいう。「おじいさん（おばあさん），あなたは足をしびれさせましたね」。

皮を剝がしながらクマとの会話が行なわれる。まず，皮を剝がしている者が，「どこを切ったらいいですか。ここですか，そこですか」とたずねる。それに対してニマクがクマの代わりに，「そう，そう」と答えていく。また，皮を剝がす者が「ここにはどんな人々がいますか」とたずねると，ニマクは「オスチャーク（またはユラーク，ヤクート，ロシア人）」と答える。この時，クマの怒りが自分達に向けられないようにするため，「エヴェンキ」とは絶対に答えない。

頭部の皮は頭部とともに，他の部位からは区別される。スィム，オレクマ，ウチュル，ウルミなどの各地方ではクマの皮は集落に運ばれてから剝がされるが，頭部の皮は最長老の婦人が剝ぎ取る。

皮を剝ぎ終ると，次に脂肪が取られる。そして，狩人たちはクマの体を樹枝で覆いかくして，毛皮と脂肪を集落に持ち帰り，全家族に分配する。各家族は各々自分の家の鍋で脂肪を煮て，宴を開き，さらにニマクの家へ出向いて，狩の話を聞く。

翌日，狩人達は橇またはボートをひいて，体の残りの部分を取りに行く。肉が集落に持ち運ばれると，残留していた人々が出迎えて，手を上下に動かして「クーク，ケーク，キーク」とワタリガラスの動作と鳴き声を真似る。持ってこられた体は針葉樹の枝を敷きつめた上に横たえられ，解体される。

まず，第一椎骨で頭部を切り離し，肺，肝臓，心臓とともに別の場所に置く。この

時頭部は鼻先が南を向くように置く。ニマクはすぐ心臓を生のまま食べる。これは，彼がクマの本性を身につけるためであるといわれている。次に目が取り出され（これは後で頭部とともに埋葬される），他の内臓も次々に取り出されて，腹膜で包まれる。残りの肉は関節ごとに分解され，最後に鼠蹊部の脂肪とペニスが切り取られる。その脂肪はすぐに焼串で焼かれるが，ペニスは保存される。

分割された肉は集落の全家族と付近に住む彼らの親族に分配される。

ここまでがクマ祭のための準備段階であり，肉の分配が終った後，本格的な儀礼（ニムガカン *нимңакан*）が行なわれる。以上までのヴァシーリェヴィチの記述 [Василевич 1971: 160–161] は主にポドカーメンナヤ=ツングースカ地方 Подкаменная Тунгуска やスィム地方 Сым などの西部のエヴェンキ族の事例に基づいているが，東部の資料（ウチュル地方 Учур, ウルミ地方Урми, オレクマ地方 Олекма）も多く用いているため，およそ，エヴェンキ族に共通に見られる過程であると思われる。しかし，儀礼に入るとそれぞれ地方ごとに独自の特色を持つようである。

スィム地方の儀礼はルィチコフが次のように報告している [Василевич 1971: 162; Рычков 1922: 109–112]。

第1日目は古い杉の木の下で薪を燃やし，深夜までクマの首筋の肉を煮る。昼間はずっとツングース独特の踊りを続け，真夜中に「クーク，ケーク」という鳴き声の合図とともに，料理ができあがったことが知らされる。

人々が集まってくると，まず老人がたき火の近くの良い場所に坐り，その他の人々はその後に円坐を作る。食事は黙々と行なわれるが，参加者は皆腹一杯肉をつめこむ。食べ終ると，やはり皆黙々と自分の家に帰っていく。

2日目は脂肪を料理したテケミン *тэкэмин*（東部ではセヴェン *сэвэн* と呼ばれる）というものが用意される。1日目と同じように朝から何も食べず，若者は日中，夢中になって踊る。やはり真夜中に「クーク，カーク」の鳴き声とともに饗宴が始まる。全員顔にすすを塗ってワタリガラスに扮し，火の囲りに円坐をつくる。それから，ニマク（この時はフユヴレン *хуюврен*——湯を沸かす人——と呼ばれている）が用意されたテケミンを銘々に配る。彼らは恭しくこれを受け取り，食べ，それが終わると帰宅して，家でクマの肉を再び腹一杯食べる。

3日目に狩人達が頭部を煮る。頭部は夕方まで鼻を南に向けたまま白樺の樹皮の上に置かれ，白樺の樹皮の「毛髪」をつけ，杉の小枝の耳輪を耳に通し，頭の上に花飾りをのせておく。他方，フユヴレン（ニマク）がペニスをナイフで切り，木の台にのせ，男たちが一人一人ナイフの刃でその木をたたく。それが終ると，フユヴレンが頭

部の皮を剝がし，鍋の中で煮る。真夜中にまた「クーク，カーク」の鳴き声とともに人々が集まり，今度は男達はクマの頭部の周囲に坐り，女達は他の部分の肉の料理の周囲に坐って饗宴が始まる。この宴の中で，ある者がクマの目を飲み込んで「運だめし」をすることがある。

祭の最後は遺骨の埋葬儀礼である。これは饗宴の翌日か翌々日に行なわれる。クマの顎骨，その他の骨，「毛髪」，耳輪，花飾り，クマの体にさしておいた弓矢はすべて白樺の樹皮でくるまれ，集落の西に運ばれ，森の中で適当な杉の木を見つけてそこに包みをかける。頭骨も若い杉の切り縮められた幹の上に安置される。これらが終ると人々はある程度後ずさりをし，それから家路につく。

集落に帰るとシャーマンによる清めが行なわれる。そしてこうした一連の埋葬儀礼を経て，そのクマは人間とエクシェリ *экшери*（天上の至高神）との間の仲介者となる。残されたクマの毛皮は主宰者（クマ穴の発見者）の姻族の者が受け取るが，シャーマンが母の氏族出身の者の場合はそのシャーマンに与える。頭部の毛皮は常にシャーマンに与えられる。シャーマンは与えられたクマの毛皮で，病気治療用の装束を作る。また，クマの足はトナカイの首にかけられてオオカミ除けのお守りとして利用され，胸骨は家の中心となる柱にかけられる。

ポドカーメンナヤ・ツングースカ地方のエヴェンキ族のクマ祭は1920年代まで行なわれ，その様子はヴァシーリェヴィチ自身によって採取されている［Василевич 1971: 163］。

解体のし方は上記のやり方と若干細かい点で異なる程度である。つまり，頭部を切り離すとすぐに目を取り出し，白樺の樹皮でくるんでタイガの中へ持ち出す。そしてあるカラマツの幹の三面に磨きをかけ，2メートルほどの高さの所にくぼみをつくってその中にその包みを入れ，「おじいさん，あなたの目をチュキ *чуки*（頭部と目を安置した木の幹）の中に隠しましたよ。ホシガラスが鳴いてますよ」と言う。幹の露出している部分にはクマの血が塗られる。

翌日，狩人達は頭部を煮て，夕方それを食べる。食べるに先立って，クマに向かって次のように話しかける。「おじいさん，あなたの頭をツングースの息子が招待するよ」。男達は頭の他にも茹でた肉を食べられるが，女達はあばらの肉しか食べることを許されない。饗宴の参加者はしばしば，肩越しに食べ終った肋骨を投げて「丸太になれ」とか，「倒木になれ」と言う。これは，森の中でクマと遭遇した時に狩人とクマの間に木が倒れてくれて戦いを有利にしてもらうためであるといわれている。

次の日，肉をはずされた頭骨は条枝にくるまれて，クマと少年の戦いという儀式が

行なわれる。この時，少年と格闘することになるクマは，骨を解剖学的に正しく組み立てたものが使われることもある。

この格闘では「弟」つまり少年が，「兄」つまりクマの骨を条枝の束でくるんだものを抱きかかえて足踏みをし，さらに倒れて上になったり下になったりする。参加者はすべて興味深く観戦し，ヤジを飛ばして応援する。

この儀式の後，再び饗宴となる。参加者たちはテケミヴナ *тэкэмивун'а*（脂肪料理）をスプーンに何杯も食べ，残りは親族たちにまで分け与える。

1日後，クマ穴の発見者が森へ頭部を埋葬に行く。クマの頭部の骨は通常，切り縮められた杉の幹の上（チュキ *чуки*）に安置される。埋葬者は集落を出る時，「おじいさん，あなたを杉の木の切株に連れて行くよ」と言う。彼は森の中に入ると適当な木を見つけて伐採し，切り口のへこみの中に頭骨を置き，「おじいさん，あなたの頭のためにこんな家を見つけたよ。ここはだれにも見つからないよ」と言って，横木をチュキの近くに倒す。チュキができ上がると彼は集落に戻る。

スィム地方と同様に，ポドカーメンナヤ・ツングースカ地方でも胸骨を家の中央の柱にかけておく。爪を敷居の下に埋めることも行なわれる。

アルダノ=ウチュル地方 Алдано-Учур のエヴェンキ族ではクマ祭が1940年代まで続けられており，これもヴァシーリェヴィチによって記録されている [Василевич 1971: 163–164]。

彼らは狩猟の時，皮を剝ぐ時，饗宴の準備の時，頭部を煮る時，饗宴の時にワタリガラスの鳴き声を出すという伝統を保持しつづけていた。彼らの祭の中心は饗宴――シヴァイバ *сивайба*――にある。

女達は一日中クマの肉を煮て，細かく切り，油で揚げる。他方男達は頭部を煮る。饗宴には近隣に住む者がことごとく呼ばれる。ただし，以前は共に遊牧活動をする家族の者だけが呼ばれたという。

料理された大量の肉は大きなフライパンの上に置かれ，頭部は皿の上に置かれる。頭部にはクマの舌をつけた棒がさしこまれる。饗宴はテントの中で行なわれるが，女性は左側，男性は右側を占め，それぞれ長老達が最前列に坐わる。頭部がのった皿が狩人のそばに置かれ，肉がのったフライパンは女達のかたわらに，そして脂肪の料理であるセヴェン *сэвэн* が入った器は脇の方にそれぞれ置かれる。

まず最も尊敬されている老人が肉塊から最初の一切れを取り，頭部と脂肪からも一切れずつ取って，棒にさし，それを狩人にわたす。狩人はそれを受け取ると肉をもう一切れ追加し，長老に返す。長老は再びそれを手にとると，上部の肉を少し切り取っ

て炉に投げ込み，「このようなものを遣わしてくれ」と言う。それから，下顎の肉を切り取って棒の上にのせた後，それを最長老の婦人に渡す。彼女は一度それをそばの老婦人に渡すが，その老婦人はすぐに彼女に返す。そして最長老の婦人も上部の肉を少し切り取って炉に投げ込み，「動物を遣わしてくれ」という。もし，然るべき老婦人がいない場合は，その棒は老人から老人へと回され，狩人に渡される。各々は棒を受け取ると「ダヴン」と叫ばなければならない。

これだけの儀式が終って初めて饗宴が始まる。男達は自分達で煮た頭部の肉を食べ，女達はフライパンの上の肉を食べる。しばらくするとセヴェンが入った入れ物が中央に置かれ，左回りに順に回される。しかし，最長老の婦人のところに来るまではだれも中のものを食べようとはしない。彼女はその器が回って来ると恭しく拝し，さじで心ゆくまで食べる。彼女が食べ終ると各人が回しながら同じさじで食べる。この時必ず「クーク」とか「ダヴン」と叫ぶ。狩人たちはセヴェンを食べる時に歯を使ってはならない。一座の者は皆，どの狩人が何杯飲むかに注目する。脂肪の入った器は3回まわされ，それが終ると饗宴も終る。残った食物は客にすべて分配される。

饗宴の後，頭骨は解剖学的に正しく組み立てられ，顎の間に棒をはめこんで，全体をさるやなぎの枝でくるむ。アルダノ＝ウチュル地方ではこうしてつくられた頭骨全体をもチュキ *чуки* という。チュキは4面を削った落葉松の幹の上に安置される。幹の削られた面にはクマの血が塗られ，さらに黒い色で横線が何本かつけられる。取り出された目は再び眼窩に戻され，耳と鼻も頭骨につけられる。残りの骨も木の枝にくるまれて，チュキのそばに作られる木の台の上に安置される。骨の埋葬式は常に黙々と行なわれる。

以上，エヴェンキ族のクマ祭について，クマ猟などの準備段階と3地方（スィム，ポドカーメンナヤ・ツングースカ，アルダノ＝ウチュル）の祭の式次第を紹介してきたが，細かい点での地方差を捨象すれば，エヴェンキ族のクマ祭の骨子は以下のように整理できよう。

1　準備段階
　1）クマ穴の探査
　2）クマ猟
　3）皮剝と解体，肉の分配
2　儀　礼
　1）饗宴（踊り，行事，食事）
　2）遺骨の埋葬

Ⅲ．クマ祭の参加者

上で示したヴァシーリェヴィチの資料に基づく例に見られるように，エヴェンキ族のクマ祭には様々な人々が参加している。しかし，彼らは無秩序に集まって騒ぐのではなく，あくまでもエヴェンキ社会に内包される諸規則に従って行動しているのである。したがって，彼らを分類，整理し，各々が従っている規則を明確にすれば，エヴェンキ社会の構成原理の中でこれまで漠然としていた部分がより明瞭となるであろう。

そこでクマ祭への参加者を次のように分類してみた。

1. クマ穴の発見者　2. ニマク　3. 狩人達　4. 長老達　5. 一般の参加者

1. クマ穴の発見者

前節の記述を整理すれば，クマ穴の発見者の果たす役割は次の通りである。

1) クマのすみかである洞穴を発見した後，そのことを自分の姻族の者に報告して，彼をニマクとし，自分の槍を渡して，クマの殺害を依頼する。

2) ニマク，狩人達をクマ穴へ案内する。

3) ニマク，狩人達とともに皮剝ぎ，解体を行ない，饗宴の準備をして，共に肉を食べる。

4) 地方によっては饗宴の後，遺骨の埋葬を行なうこともある（例えば上記のポドカーメンナヤ・ツングースカ地方など)。

クマ穴の発見者は，ニマクを選出したり，遺骨の埋葬を行なうなど，祭の代表者としての役割をある程度果たし，いわゆる「主宰者」に準ずる地位にあると考えられる。一般的に，社会的に重要な地位を占める儀礼の参加者を分類し，説明していく場合，まず，中心となって儀礼を催し，客人を招いて饗宴を張る「主宰者」について言及しなければならないが，本節の第一項目に「クマ穴の発見者」という項目を設定したのもそのためである。

しかし，クマ穴の発見者が本当に祭を主宰しているのかどうかはきわめて疑問である。というのは，クマを殺害した後のその遺体への態度，饗宴に際しての肉や骨に対する敬意の払い方が他の狩人や男達と変わりなく，また，彼が客人を招いてクマの肉を皆に振舞っているわけではないからである。

クマ穴発見者が祭の主宰者か否かということを別にしても，ヴァシーリェヴィチ，その他の民族学者の記述，資料は，エヴェンキ族のクマ祭が，主宰者不在の祭であるという印象を与える。

主宰者または主宰する集団が存在するのかどうかという問題は，彼らの狩猟にまつわる慣習と，彼らのクマ祭の性格そのものとに関係している。

彼らの狩猟活動に関する慣習とは「ニマト」*нимат* と呼ばれるもので（名称が「ニマク」と関係が深いが，そのことは次項で触れることにする），それは，狩人は自分が森で得た獲物（特に食肉獣）を決して一人で消費してはならず，集落内の他人（特に他氏族の者）に毛皮か肉の一部を分け与えなければならないという不文律である。この不文律は比較的近年まで厳格に守られており，ニマトに類する言葉と慣習はエヴェンキ族だけでなく同じ北方ツングース系の民族である，オホーツク，カムチャツカのエヴェン族（ラムート族）にまで拡まっている［トゥゴルコフ　1981: 134; Туголков　1963: 28; Гурвич　1960: 74］。

エヴェンキ族の集落では，この慣習に基づいて，狩人が持って来た獲物は集落内で分けられてしまい，しかもその分配については狩人自身が口を出せない［トゥゴルコフ　1981: 134］。獲物は決して彼の所有物ではなく，狩人は集落の人々からの賞讃だけで満足する。

個人猟による獲物が狩人本人の自由にならないのであるから，集団猟で得られた獲物は無論，集落全体で，一定の規則に基づいて分配されてしまい，狩人達に特別な権利はない。したがって，クマ祭用に行なわれるクマ猟でも，クマ穴の発見者には自分が見つけたクマに対して特別な権利，権限はない。それどころか，クマを殺す権利を他人に譲渡しなければならない。

また，ニマクの方もクマを殺す権利をゆずり受け，皮剝ぎ，解体を指導するが，彼にも殺したクマを自由に処分する権限はない。つまり，発見者も殺した者もクマを自分のものにはせず，恐らく，饗宴に際して皆に振る舞うという意識もないものと思われる。また逆に集落の者も，特定の個人あるいは親族集団に招待され，クマの肉を振る舞われているという意識で参加しているのではない。クマの肉が食べられるのは当然のことであり，自分らが主宰して祭を行なっているという意識があるのではないかと思われる。

特定の主宰者の存在についての第2の関連問題は，エヴェンキ族のクマ祭が死者の弔い上げ，最終的な供養といった意味を持たないということにある。

アイヌ型のいわゆる「飼いグマ祭」を行なうギリヤーク族，ウリチ（オルチャ）族などではクマ祭が氏族による死者の弔い上げでもあり，これによって死者は氏族の祖霊の仲間入りをすることになる［Zolotarev　1937: 113; Штернберг　1933: 60; 黒田　1974: 39］。したがって彼らのクマ祭は特定の氏族の者の主宰で行なわれ，客

は饗宴に招待されて歓待を受け，参加者の役割は主宰者との関係で規定される。

しかし，ヴァシーリェヴィチ，トゥゴルコフ，レーヴィンらの記述を見る限り，エヴェンキ族においては，クマ祭に死者の供養という意味はなく，特定の氏族が祭の中で主人役を務め，集落の者を歓待するという形式はとられていない。ウリチのクマ祭では出される食物が多いほど主宰者は賞讃され，少ないと非難される [Zolotarev 1937: 116]。しかし，エヴェンキの場合，人々は自主的に思う存分食べるのであって，食べ物が少ないとして特定の者が非難されるという記述は見当たらない。

以上2つの観点より，我々はエヴェンキ族のクマ祭には特定の個人または親族集団（氏族）による主宰者なる者の存在を疑問視する。ただし，全くその存在を否定するわけではない。というのは，クマ祭を催そうとするある個人または集団がクマ穴を探査し，発見者になっている可能性があり，また，クマ祭を観察した研究者も我々もクマ穴発見者とその親族の役割を過少評価している可能性もあるからである。最終的な結論はより多くの資料を得てからにしたい。

2. ニ　マ　ク

ニマクは，上で紹介した記述にもあるように，エヴェンキ族のクマ祭の過程全体を通して最も多くの役割を果たす人物である。ニマクには集落内のクマ穴発見者の姻族の者がなるが，ヴァシーリェヴィチは妻の兄弟がなることが多いと述べている [Василевич 1971: 160]。

ニマクの役割を列挙すれば以下のようになろう。

1) クマ穴発見者から譲り受けた槍でクマを仕止める。

2) クマの皮剝ぎ作業を指揮する。

3) 皮剝ぎの際の問答において，クマの代弁者となって返答する。

4) クマを解体する際，クマの心臓を生で食べて，クマの本性を身につける。

5) フユヴレンとして参加者にテケミン（脂肪の料理）を配る。

6) クマの頭を煮る前にその皮を剝がし，さらにペニスを切り取って木の台にのせる。

(5), 6) はスィム地方の事例より）

これらの中で重要な点は，クマを殺すだけでなく，クマの代弁者となったり，心臓を食べてクマの本性を身につけたりして，クマの代役を果たすことにもある。

ニマクは，クマ穴発見者の姻族であること，クマの代役を務めること，そして前項で指摘した「ニマト」という慣習と言葉の上でもその内容の上でも関係が深いことの

3つの点において注目すべきである。

ニマク～ニマトとそれに類する語彙を最初に採取したのはカストレン M. A. Castrén である。彼はそのツングース語に関する著作の語彙集の中に「ニマク」*нимак* という単語を掲載し，それに Nachbar (「隣人」) というドイツ語の単語をあてている [Castrén 1856]。その後ティトフがそのツングース語の辞書に *нiмат*, *н'амаччiрiн*, *нiмедывра* といった単語を載せている [Титов 1926]。前二者は名詞で，彼は Дарственный пай: обычно половина шкуры――贈与さるべき分け前，通常半分の毛皮――という意味をつけ，後者は動詞として，отдал пай, как подарок Тут――贈り物 Тут として，分け前を与える――という意味をつけている。

しかし，ニマク～ニマトという言葉を本格的な研究対象としたのはシロコゴロフであった。彼は氏族成員間の関係を表わす慣習としてニマディフ *nimadif* という慣習を取り上げ，それを次のように説明している。「即ち純粋な形では，これは狩猟の獲物を氏族員に与えることから成り立っている――換言すれば狩猟の成果は狩猟者のものではなく氏族のものなのである――。」[シロコゴロフ 1941: 388] そして，クマを皆で食べるという慣習がこれと同じクラスに属すとも述べている [シロコゴロフ 1941: 389]。

さらに彼はこの言葉に関する註において，関係語彙を紹介して，この言葉が「訪問」，「賓客」という意味を表わす言葉（例えば，ニマウ *n'imaw*, ニマヴ *n'imav*, ニマ *n'ima* など）と関係が深いことを指摘し，ニマディフと同じ慣習がヤクート族で非常に広く行なわれていることから，その起源をヤクート族に求めている。彼はその理由として次のように述べている。

> 「ツングースがこの慣習をヤクートから借用したといふことは，實にありさうなことである。その理由の一つはヤクートに於いてはこの慣習はツングースに於けるより行き亘つてゐるといふことであり，二はツングースの諸呼稱は「賓客」，「訪問」といふ觀念と關係あるらしいことである。ツングースは從つてこの風習を，ヤクート（ツングースより一層「文明で」ある）の所へお客に行つたとき「良い作法」の一形式として採用したのであらう。故にツングースの胸中ではこの慣習は「訪問」や「賓客」といふ觀念と關係を持つたのであらう。」[シロコゴロフ 1941: 396]

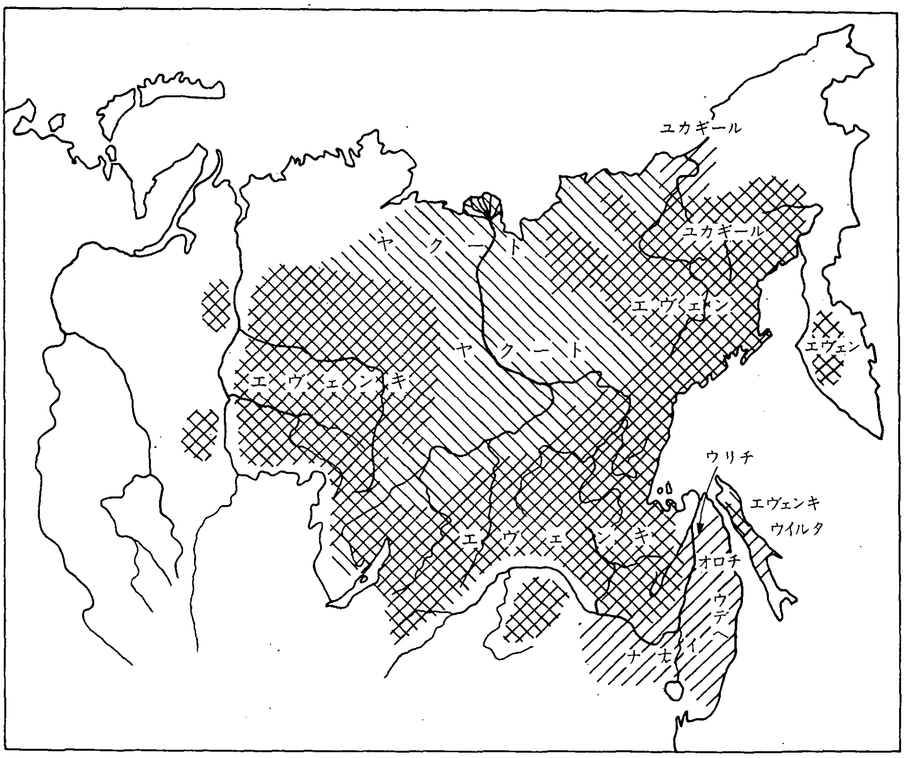
シロコゴロフのこのニマディフという慣習の解釈のうち，この慣習が「訪問」「賓客」という観念と関係があるということは大いにあり得ると思われる。というのは，後に示す表に見られるように，獲物を狩猟者が独占せず，一部を他人に分け与えるという慣習を表わす言葉（ニマト，ニマディフなど）と訪問，賓客を表わす言葉が，非

常に類似しているか，同じ語幹を共有しているからである。

しかし，この慣習の起源をヤクートの慣習に求めている点と，この慣習が氏族内の成員間の関係を規定するという考え方には疑問を感じざるを得ない。特に後者の点については，シロコゴロフが獲物を同一氏族成員に渡す，または，獲物は氏族のものであると述べているのに対し，後年，エヴェンキ族，エヴェン族の調査に従事しているヴァシーリェヴィチやグールヴィチ，トゥゴルコフらは，獲物は集落内の他氏族の成員に渡さねばならないと述べている [Василевич　1958: 293; Гурвич　1960: 74; トゥゴルコフ　1981: 134]。

この問題はエヴェンキ族の社会構成にかかわる重要なものであるが，その前に，ニマト～ニマクに類する言葉の意味と分布を表と図で示しておこう。

この表1で表わしたように，これらの言葉はニマト系の語とニマク～ニメク系の語に大別できる。前者は「狩の獲物の分け前」や「獲物を集落内で分配すること」，「毛



ニマク～ニメク系　ニマト系

図2　ニマト～ニマクの類語の分布状況

表1　ニマト〜ニマク関係の語彙

1.　ニマト系のことば

	民　　族	方　　　　言	意　　　　味
немадивут- (v.)	エヴェンキ	北バイカル	集落内の全成員間で獲物を分け合う
нимāн- (v.)	〃	ウチュル	肉で客にごちそうする
нимāт〜н'имāт (n.)	〃	ポドカーメンナヤ・ツングースカ，アルダン，ヴェルホレンスク，エルボガチェン，ゼーヤ，イリンピ，マーヤ，ネプ，サハリン，トッキン，トンモト，トゥンギール，トッチン，ウルミ，ウチュル，チュリマン	1) 分け前（狩猟活動における分配，普通獲物の毛皮の半分） 2) 客や仲間の狩人に毛皮の一部を分け与えること 3) 分け前をもらえる仲間の狩人
намачир〜н'амачир (n.)	〃	北バイカル	4) 食物（クマの脂肪で揚げられたクマの肉）〔マーヤ，サハリン，トッチン，ウルミ，ウチュル〕
нēмат (n.)	〃	ウチュル	
нимат (n.)	〃		
ниматтан (n.)	〃	ウルミ	5) 狩人の分け前〔ポドカーメンナヤ・ツングースカ，ヴァナヴァル〕
н'амат (n.)	〃	ウチュル	
нимāт-〜н'имāт- (v.)	〃	ポドカーメンナヤ・ツングースカ，アルダン，サハリン，トッキン，トンモト，ウルミ，ウチュル，チュリマン	1) 殺した獲物の肉を与える（普通オジに） 2) 自分の収入の一部を他人に与える 3) 獲物の毛皮を客人や狩人仲間に与える
намат- (v.)	〃	ネプ，北バイカル	4) 贈り物をする
ниматкӣ- (v.)	〃	エルボガチェン，スィム，ウルミ，ウチュル	殺されたクマを他氏族の者に渡し，皮を剝がせる
ниматкин (n.)	〃	ウルミ，ウチュル	毛皮をとること，特にクマの毛皮を剝ぐこと
н'амāччирин (n.)	〃		獲物の分け前（老人，寡婦，貧民に分け与える）
н'и̇мāду̇- (v.)	エヴェン	オーリャ	獲物を与える，集落の者に獲物の一部を渡す
н'и̇мāӄ (n.)	〃	オーリャ	分け前をもらう人
н'и̇мāт (n.)	〃	オーリャ，サックィルィル，トンポン	1) 分け前，取り分 2) 獲物を集落内で平等に分けるために，老人にそれを渡す習慣
н'и̇мду̇лду̇- (v.)	〃	サックィルィル	助ける
ни̇мат (n.)	ネギダール	ニージネ=アムグン	分け前，取り分
ни̇мат- (v.)	〃	ニージネ=アムグン	与える，分け前を与える 獲物の一部を与える

2. ニマク系のことば

	民族	方言	意味
нимз-～н'имэ (v.)	エヴェンキ	ポドカーメンナヤ・ツングースカ，アルダン	隣人のもとへ客に行く，客になる（訪問する）
нимэв-～нимэ̄в-～н'имэ̄в- (v.)	〃	ポドカーメンナヤ・ツングースカ，アルダン，サハリン	
нимэ̇ɣ-～нимэ̄ɣ-～н'имэ̄ɣ- (v.)	〃		
нимаɣ- (v.)	〃	スィム	
нимэвӯ-～н'имэвӯ- (v.)	〃	ポドカーメンナヤ・ツングースカ，バルグジン，スィム，北バイカル	度々客になりに行く，客になる（訪問する）
нимэɣӯ-～н'имэɣӯ-～ (v.)	〃	アルダン，ゼーヤ，サハリン，ウルミ，ウチュル	
н'имōву- (v.)	〃	バルグジン	
нимэвуǯэ̄～нимэ̄вӯǯэ̄～н'имэ̄ӯǯэ̄ (n.)	〃	ポドカーメンナヤ・ツングースカ，アルダン，ゼーヤ，ウチュル，チュリマン	客
н'имōвуǯэ (n.)	〃	バルグジン	
н'имэ̄вук (n.)	〃	トッチン	
н'имэ̄ɣӯǯэ̄ (n.)	〃	バルグジン，ゼーヤ，サハリン	
нимэɣ～нимэ̄ɣ～н'имэ̄ɣ (n.)	〃	ポドカーメンナヤ・ツングースカ	1) 客 2) 隣人（訪問客） 3) 他氏族の者〔アルダン，イリンピ，スィム，ウチュル〕
нимэк～нимэ̄к～н'имэ̄к (n.)	〃	ポドカーメンナヤ・ツングースカ，アルダン，マーヤ，ナカンノフ，サハリン，トッキン，トンモト，トッチン，ウルミ，ウチュル，チュリマン，チュミカン	
нимāк (n.)	〃	アルダン，エルボガチェン，ゼーヤ，イリンピ，ネルチンスク，スィム，サハリン，ウルミ，ウチュル	
нимэɣӣ-～н'имэɣӣ- (v.)	〃	ポドカーメンナヤ・ツングースカ	客として訪問する
нимэɣӣсин-～н'имэɣӣсин (v.)	〃	ポドカーメンナヤ・ツングースカ	出発する，客になりに出向く
нимэјиктэ-～н'имэјиктэ- (v.)	〃	ポドカーメンナヤ・ツングースカ	客になりに行く 客として行く
нимэктэ-～н'имэктэ- (v.)	〃		
нимэктӯ- (v.)	〃	アルダン，エルボガチェン，イリンピ，ネプ，スィム，トクミン	
нимэ̄кэ̄т-/ч-～н'имэ̄кэ̄т-/ч- (v.)	〃	サハリン，トンモト，トッチン，ウチュル，チュリマン，チュミカン	隣人として生活する
нимэhэ- (v.)	〃	アルダン	

	民族	方言	意味
нимэ̄н～н'имэ̄н (n.)	エヴェンキ	ポドカーメンナヤ・ツングースカ	
ниман (n.)	〃	トンモト	
н'имо̄н (n.)	〃	ポドカーメンナヤ・ツングースカ	1) 隣人として客になりに行くこと 2) 家政，天幕
н'имэ̄римсэк (n.)	〃	ゼーヤ，イリンピ，スィム，トッキン，トンモト，トゥンギール，トッチン，ウルミ，ウチュル，チュリマン	
нимэр～нимэ̄р～н'имэ̄р (n.)	〃	ポドカーメンナヤ，ツングースカ，アルダン，エルボガチェン，ゼーヤ，イリンピ，マーヤ，ネプ，スィム，サハリン，トッキン，トクミン，トゥンギール，ウルミ，ウチュル，チュリマン	1) 客 2) 隣人 3) 家族〔ゼーヤ，マーヤ，トッチン，ウルミ，ウチュル，チュリマン〕
нiмау- (v.)	ソロン		客になりにいく
нимэ̄р (n.)	〃		2軒並んだテント
н'имэ̄ (adv.)	エヴェン	オーリャ，モム，ペンジナ	隣人として
н'имэ̄лтэ (adv.)	〃	サックィルィル	
н'имэɣ- (v.)	〃	ブィストリン	客になる
нiмаï- (v.)	〃	コルィマ=オモロン	
н'имэ̄ɣни- (v.)	〃	オーリャ，ブィストリン，モム，ペンジナ，トンポン	度々客になりに行く
н'имэɣнэ- (v.)	〃	オーリャ，ブィストリン，モム，オホーツク，ペンジナ，トンポン	
нiмаïна- (v.)	〃	コルィマ=オモロン	客になりに出向く（近い隣人へ）
н'имэ̄кнэ- (v.)	〃	サックィルィル	
н'имэ̄ӈнэ- (v.)	〃	アルライホフ	
н'имэ̄ɣнэ̄з̌ (n.)	〃	オーリャ，ブィストリン，モム，オホーツク，ペンジナ，トンポン	
н'имэвчэ (n.)	〃	サックルィル	客，客たち（近いところからの）
н'имэӈнэз̌ (n.)	〃	アルライホフ	
н'имэ̄к (n.)	〃	オーリャ，アルライホフ，ブィストリン，モム，オホーツク，ペンジナ，サックィルィル，トンポン	隣人（隣のテントまたは隣の集落の者をさす）
нiмак (n.)	〃	コルィマ=オモロン	
н'имэкэ̄т-/ч- (v.)	〃	オホーツク	隣人を持つ
н'имэ̄р (n.)	〃	オーリャ，アルライホフ，モム，オホーツク，ペンジナ，サックィルィル，トンポン	1) 隣人 2) 隣人のテント〔コルィマ=オモロン〕
нiмар (n.)	〃	コルィマ=オモロン	3) 家政〔モム〕
н'имэj- (v.)	ネギダール	ヴェルフネ=アムグン，ニージネ=アムグン	客になりに行く，客になる
н'имэх, н'имэхӣ (n.)	〃	ニージネ=アムグン	隣人
н'имэхилмэ̄т-～н'имхэммэт- (v.)	〃	ニージネ=アムグン	隣人として生活する

	民　族	方　言	意　味
н′имэкэ (n.)	オ　ロ　チ		
н′имэн̥кэ (n.)	〃		1) 隣人 2) 同じ集落の者
нима (n.)	〃		
ниман̥ка (n.)	〃		
ниманка (n.)	〃		
н′имэри- (v.)	〃		客になりに行く
нимэн̥кэ (n.)	ウ　デ　ヘ	ホル	1) 隣人 2) 遠い親族〔ホル〕
н′имэн̥кэ (n.)	〃	サマルギン	
нимэн̥кэмулэби- (v.)	〃	ホル	隣人として生活する
н′имэли- (v.)	〃	サマルギン	客になりに行く
н′имэ (n.)	ウ　リ　チ		隣人
н′имэнчэ (n.)	〃		1) 隣人たち　2) 隣
н′имэри-～ н′имэру- (v.)	〃		隣人のところへ客になりに出向く
н′мэрикту (n.)	〃		隣人のところへ客になりに行くのを好む人
н′нмэрэпси- (v).	〃		度々隣人のところへ客になる
н′имэ (n.) н′имэ̄н′н′ēн′и (n.)	ウ イ ル タ		1) 隣人　2) 客 3) 知人
н′имэри- (v.)	〃		近い隣人のところへ客になりに出向く
н′имэ̄рихэн′н′ӣ (n.)	〃		客
н′имэ̄рэтчи-～ н′имэ̄рэччи- (v.)	〃		度々客になる
нимкэ̄ (n.)	ナ　ナ　イ		
нимкэн̥кэ̄ (n.)	〃		
нимэ̄ (n.)	〃	ナイヒン	1) 隣人 2) 隣人の
нимэкэ̄ (n.)	〃		
нимэкэн̥кэ̄ (n.)	〃		
нимэ (n.)	〃	クル=ウルミ	
нимэри- (v.)	〃	ナイヒン	隣人のところへ客になりに出向く
нимэрису (n.)	〃	ナイヒン	隣人のところへ客になりに行くのを好む人

v.＝動詞　n.＝名詞　adv.＝副詞

〔*Сравнительный словарь тунгуссо-маньчжурских языков* 1975:593-596〕による。

表記は当辞書に準拠し，キリル文字主体のロシア式音声記号を用いた。

皮を他氏族の者に渡すこと」などの意味を持ち，後者は「隣人」，「客人」，「訪問」などの意味を持つ。しかし，両者は全く別々の語群ではない。

例えば，*нимāт～н′имāт* という言葉には「分け前をもらえる仲間の狩人」という意味があり，*нимāн-* という動詞には「肉で客を歓待する」という意味があって，

これらはニマク～ニメク系の語と共通の意味合いを持つ。そして，「客人」として出向けば必ず歓待され，ごちそうを出され，「隣人」,「集落内の人々」とはとれた獲物を共に分け合う関係を持っている。

したがって，このニマト，ニマク～ニメク両系統の語群は意味する範囲が大きく重なっており，シロコゴロフが言うように，ニマト（彼はニマディフとしている）という慣習は「隣人」,「賓客」,「訪問」といった観念と密接に結びついている。ただし，ここでさらに注目しなければならないのは，両語群の分布域である。

まずニマク～ニメク系の語の分布に注目すれば，この系統の語はほぼツングース系の民族全域に分布している（満州族は今回の考察の対象にしていないので未調査である)。しかし他方，ニマト系の語はエヴェンキ，エヴェン，ネギダールのいわゆる北方ツングース系の言語を持つ民族に限られている。

このことは，決してオロチ，ウデヘ，ウリチ，ナナイ（ゴリド），ウイルタ（オロッコ）などの民族にニマトに類する獲物の分配，相互扶助の習慣がないということを意味するものではない。彼らの言語の中に，獲物の分配の慣習と「隣人」,「客人」,「訪問」などの観念との結びつきがことばの形で表出していないだけであると見るべきであろう。

しかし，この分布状況は両系統の語の生成過程の一面を表わしている。つまり，借用語か独自の語かは別として，まず「賓客」,「訪問」を意味するニマク～ニメク系のことばが分化の始まる前のツングース語に現われ，それから北方ツングース系の人々が分化した後に，彼らの間で獲物の分配を意味するニマト系のことばが出現したと考えられる。ただ，両系統のことばの発生に外来の影響があったのか，それともその発生が周辺民族に影響を及ぼしたのかはまだ不明である。

ニマト，ニマクに類する他民族のことばとしてはヤクート語の *ǯымāт～нjымāт*（贈り物，特に殺されたトナカイの毛皮）と *ǯымāттā-～нjымāттā-*（贈り物をする)，ユカギール語の ***нинэӊ, нумо***（両方とも住居，テント，天幕を意味する）がある。ヤクート語の方がニマト系のことばの類語であり，ユカギール語の方がニマク～ニメク系の類語である。

ユカギール族はシベリアの先住民族と考えられている古アジア系の諸民族の一派とされていることから，ユカギール語の ***нинэӊ, нумо*** がニマク～ニメク系の語の基礎になっているとも考えられるが,「テント」,「住居」の意味を持つのは，ユカギールに最も近い地方で生活しているエヴェン族のニメーク ***н'имэ̄к*** とニメール ***н'имэ̄р*** だけであり（表1参照)，ユカギール語のことばが全ツングース語にまたがるニマク

〜ニメク系の言葉の祖先であることを断言することはまだできない。

また，ヤクート語の*ǯымāт* と *нјымāт* はニマトと非常によく類似しているが，これもどちらからどちらへ影響したのか断言することはできない。ただ，ヤクートと北方ツングース諸族（エヴェンキ，エヴェン，ネギダール）は共にタイガの中で狩猟をし，接触する機会は多かったので，何らかの影響を互いに及ぼし合ったのは事実であろう。

しかし，シロコゴロフのいう，エヴェンキのニマトの「ヤクート起源説」には説明上かなり無理がある。確かに，ヤクートの間で，客に対する食料，毛皮等の贈与，それに対する返礼が盛んであるのは事実であるが，客に対する贈与，集落内での獲物の分配，相互扶助はヤクート，エヴェンキだけに限られず，東シベリアの諸民族に普遍的に見られる現象である。したがって，エヴェンキがヤクートから借用したとは限らない。しかも彼は，エヴェンキがヤクートを「訪問」した時，よい作法として，「より文明」的であるヤクートから借用したとしているが，ヤクートの中でも「より文明」的である南部の人々は，この贈与の慣習を煩わしがり，獲物が手に入った時や，食事の準備の時に他人に見つからないように隠れるなどの姑息なことを行ない，さらに，食物を旅人や隣人にまで売りつけるなど，彼らの間で慣習の空洞化が目立っている［TOKAREV and GURVICH　1964: 275; SUMNER　1901: 69］。したがって「より文明」的なところから「良い作法」として借用したという彼の論法は当たらない。

以上より，エヴェンキのニマトは，語彙の面でも慣習の内容の面でもヤクートからの借用とは言い切れないのである。

シロコゴロフによって初めて提起された問題であるニマト，ニマクに関する慣習と氏族組織との関係は以下のように考えていくべきであろう。

シロコゴロフは前述で引用したように，ニマト（ニマディフ）を氏族成員間の関係を表わす慣習と規定する。彼によると，現実に行なわれていた隣人や他氏族成員へのニマトの適用は，異氏族の者が入り混じって定住地が形成されるという近年の新しい状況への適応であるということになる［シロコゴロフ　1941: 389］。

元来，シロコゴロフはツングース（エヴェンキ）社会における氏族の位置づけを著しく高く評価していた。

彼によれば，ツングースの氏族は(1)その氏族で生れた男女，(2)その氏族が養取した者，(3)他の氏族に属するが，その氏族の男子と結婚した婦人，の３種類の人々で構成され，「その諸員が共通の起源を有し，防衛すべき何らかの共通の利害を有している社会単位」である。そして，単位として次の８項目の事項において行動する［シロコ

ゴロフ　1941: 378–379]。

1) 族外婚の諸慣習と諸原則とによって規定されている婚姻事項。
2) 結婚しなければならない氏族員を援助して，氏族を更に増大せしめること。
3) 氏族員の道徳（諸慣習と諸規定）に関する事項。
4) 財産関係などに基づく氏族員間の葛藤。
5) 氏族の名誉と復讐。
6) 通例滅多にないが，種々の法律上の問題。
7) 政治的機能をも含む氏族間及び民族間の諸関係。
8) 行政的機能（行政的組織が当局から任命された別個なものでなければ)。

氏族の社会単位としての団結は，最高権威である氏族会の開催と氏族の神（スピリット）の存在によって保障され，氏族は共同墓地と一定の領有地を保有している［シロコゴロフ　1941: 380–387]。シロコゴロフも後のソ連のエヴェンキ研究者と同様に，民間伝承の中に領域をめぐる氏族間抗争があることから，氏族領域の観念がかつては氏族の基本的観念の一つであったという見解を表明している。彼の調査当時の状況（20世紀初期）では，土地はすべて異氏族成員によって構成される「狩猟組」によって分割されていたが，これは氏族領域の分解過程であると彼は述べる［シロコゴロフ　1941: 388]。

彼の北方ツングース氏族の研究は現在では貴重な資料である。しかし，彼が様々な氏族の成員たちによって狩猟組を結成する状況は比較的近年のことであると述べている点は大いに疑問を感じざるを得ない。というのは，エヴェンキ族やエヴェン族はトナカイを乗り物として利用しながら狩猟活動を行なうようになって以来，その行動半径を大いにひろげており，タイガの中で異氏族の者と出会い，共に行動する可能性が高いからである。そして，エヴェンキ達がトナカイの背に乗って狩猟活動を始めたのはロシア人が彼らと接触するはるか以前のことであり，彼らがトナカイを荷駄として利用する原初的形態のトナカイ飼養を始めたのは，2000年前から3000年前にまでさかのぼることができる（[Вайнштейн　1971] に詳しい)。つまり，彼らの行動半径の大きな狩猟活動は長い歴史を持っているわけである。

度重なる移動の中で，彼らの氏族は離合集散，生成消滅を繰り返したと思われるが，そのような状況においては同氏族の者だけで集落や狩猟集団を結成したと考える方が不自然であろう。広大なタイガの中で，異氏族の者と遭遇した際，時には狩猟地の縄張り争いから抗争が起きることもあったであろうが，厳しい自然の中で生き抜くために，互いに獲物を分け合い，協力し，援助し合っていたと考えられる。

エヴェンキには，彼らが所属氏族にかかわらず，相互に助け合ってきたことを表わす狩猟活動に関する慣習がいくつかある。例えば，仕掛弓で殺された動物を見つけた者はだれでも枝肉の半分までは自分のものにしてよかった。また，高価な「香素」をもち，貴重な現金収入となるはずのジャコウネコも，どうしても必要な時は，あとで一言ことわりさえすれば他人のワナから，頭と前足（神聖な部分とされる）を除いて，とってしまうことができた［トゥゴルコフ　1981: 132］，そして，本項で詳述しているニマトもこれらと同じ種類の慣習と考えるべきである。つまり，氏族の立場から規定される慣習ではなく，共に住む者，共に活動する者の秩序と相互扶助という立場から規定されるものであり，氏族内での成員の行動を規制し，成員間の関係を明確にするのではなく，集落，狩猟集団内での行動を所属氏族に囚われないで規制するわけである。

シロコゴロフがニマトを氏族内での秩序と相互扶助を目的とした慣習であると述べるのは，まず，エヴェンキの集落や狩猟集団は同一の氏族成員によって結成されるのが原則であり，ニマトの相手となるニマクと呼ばれる「隣人」は元来必ず同氏族成員であるはずだったという考え方が根底にあったためである。しかし，エヴェンキ族やエヴェン族のトナカイ飼養が非常に長い歴史を持ち，その行動範囲の広い狩猟，遊牧活動が古くから行なわれていたことを考慮すると，同一氏族成員で集落や狩猟集団を結成するのは決して原則ではなく，様々な氏族に属する人々が，時には異民族出身の者も含んだ形で，結成するのが通常の姿であったと考えるべきである。したがって，ニマト，ニマクをめぐる慣習は，あくまでも集落内の人々の相互の協力，助け合いであり，決して，獲物が氏族のものであるということを意味するのではない。そして，ニマト，ニマクの慣習をはじめとする種々の狩猟活動にまつわる慣習や規則は，氏族の枠を越えた，狩人と狩人の間の秩序と相互扶助を目的としていると考えられる。

以上クマ祭で重要な役割を果たすニマクが，ニマトまたはそれに類する言葉で呼ばれる，獲物の分配をめぐる慣習と，言葉の上でも内容の上でも密接に結びついており，しかもその慣習が非氏族的な[4]性格を持っていることを明らかにした。しかし，前節で紹介したクマ祭の準備過程の中で，ヴァシーリェヴィチが，ニマクはクマ穴発見者の姻族の者がなる，とりわけ，その妻の兄弟が選ばれると述べている点に注目すると，ニマク選出には単に集落内の相互扶助を目的とした規則ばかりではなく，エヴェンキ族一般の親族構造を反映した規則も働いていると考えられる。

4）ここでいう「非氏族的」とは，上で引用したシロコゴロフの定義した氏族のもつ諸規制にとらわれていないという意味である。

ニマクのような重要な役柄を自分の姻族の者にまかせるということは，ウリチ族のクマ祭においてグシ（*gusi* 母の兄弟）とガマスン（*gamasun* 父の姉妹の息子，母の兄弟の息子）が重要な働きをすることと軌を一にしていると思われる。

ウリチ族のクマ祭は隣族のギリヤーク（ニヴヒ）族の場合と同様に，アイヌ型の「飼いグマ祭」であり，また，死亡した氏族成員の弔い上げの儀式でもある。したがって，エヴェンキ族の場合と異なり，主宰者または主宰氏族が存在し，参加者はその主宰者に招かれ，獣肉，魚，クマの肉などで歓待される。

そのクマ祭の過程の中で特異な役割を果たすのが主宰者にグシまたはガマスンと呼ばれる関係にある人々である。

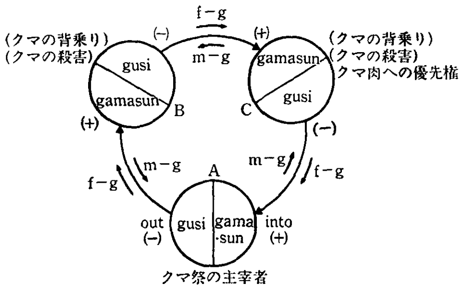
彼らは他の客たちとともに犬の競走に参加したり，饗宴に参加して大いに飲食する他に，次のような働きをする。1）祭の8日目，イナウ作りが終った後，クマがイナウを見せるために檻から出されるが，その時に，自分の勇気と機敏さとを示すために，クマの背に飛びつくという行事を行なう。2）祭の9日目，グシまたはガマスンの一人がクマを殺す弓矢をひく。3）祭の15日目，供せられたクマの肉をグシに属する者が最初に食べる。特に最年長のグシにはクマの上顎が与えられ，妻の兄と妻たちの父親たちには下顎が与えられる [Zolotarev　1937: 118–120]。

祭のクマを殺す行為をグシまたはガマスンの人々にやらせたり，グシの人々にクマの肉を優先的に与えるということは，ウリチの親族構造と深いかかわりを持っている。

レヴィ=ストロースの理論を用いてツングース諸族の親族構造を研究する黒田信一郎氏によれば，グシは wife giver の出自集団を，ガマスンは wife taker の出自集団を指すことになり，グシはガマスンに対して構造的に優位にある [黒田　1980: 11]。このグシとガマスンの関係は相対的なものであるから，クマ祭の主宰者にとっては母または妻の親族がグシとなり，自分達は彼らに対してガマスンとなる。また，自分達の血縁の女性が嫁した先がガマスンとなり，それに対して自分達はグシとなる。

クマ祭のクマを直接の姻族であるグシまたはガマスンの人に殺させるというのは，主宰者として直接手を下すのを避けるという意味を持ち，これがトーテムの遺制であるとする説がある [Zolotarev　1937: 126]。しかし，クマの肉がグシに優先的に与えられるという点を考慮すると，クマの殺害や食事はウリチの親族構造，つまり，グシの優位性とガマスンの劣位性を反映していると考えるべきであろう。

ただし，クマ肉の食事については，グシの人々への敬意から優先的に食べてもらうことになると解釈できるが，殺害についてはゾロタレフはどちらとも指定していないため，この行為が優位の者にやってもらう行為なのか，劣位の者にやらせる行為なの



out : marry out (−); superior
into: marry into (+); inferior
m-g: male gift
f-g : female gift
A, B, C＝氏族（出自集団）

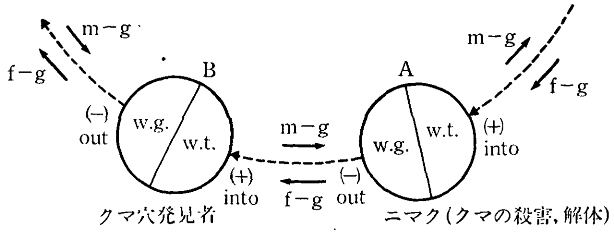
図3　ウリチ族の社会構造（オロッコ＝オルチャ体系）[黒田　1980: 11] を改変

かは不明である。クレイノヴィチらの記述によれば，ギリヤークでは劣位にある wife taker の者にクマを殺させ，クマ肉も大半を彼らに供してしまうという [黒田　1975: 41, 47–48; ZOLOTAREV　1937: 126, 128]。したがってギリヤークの事例では食事に関してはウリチと逆になっている。

エヴェンキの親族構造に関しては，ギリヤークやウリチ，ウイルタのように整然とした体系化はまだなされていない。ただ，一般交換の体系がレヴィ＝ストロースによって大枠として想定されているだけである。

しかし，クマ穴発見者がその旨を自分にとって wife giver の集団の一員である姻族の者に報告し，彼をニマクとし，クマ殺害の権利と自分の槍を渡すなどは，明らかに wife giver の集団の wife taker の集団に対する構造的な優位を反映していると見られる慣習である。そして，祭の形態こそ違うが，クマ祭に wife giver の集団の優位性が表出するという点で，ウリチ族の場合と共通している。

我々は，クマ祭でクマ穴発見者の姻族の者であるニマクが重要な役割を果たすという現象を，嫁出した姉妹の子供に対する養育，援助の義務（エヴェン族の事例につい



out : marry out (−); superior
into: marry into (+); inferior

m-g: male gift
f-g : female gift

w.g.: wife giver
w.t.: wife taker

A, B＝氏族（出自集団）

図4　エヴェンキの社会構造とニマク

ては [Попова　1981: 149]）や，結婚の際に嫁資として花嫁側の氏族から新しい夫婦に対して将来必要な生活必需品が贈られること［シロコゴロフ　1941: 472; Василевич　1969: 158; Попова　1981: 149] と同種の現象であるとみなす。つまり，構造的に優位にある wife giver 集団の wife taker 集団に対する権利と義務の一つなのである。

結局，エヴェンキのクマ祭におけるニマクという役柄の存在は，彼らの集落形態と狩猟民社会の秩序を反映するだけでなく，彼らの親族構造の一面を鮮かに映し出しているのである。

3. 狩　人　達

クマ穴発見者，ニマクとともにクマ穴へおもむく一団の狩人達の役割は，クマ猟の補助とクマの皮剝ぎ，解体の手伝い，集落への運搬，クマ肉や頭部の調理，そして遺骨の埋葬である。ただ，こうした仕事はすべて他の男達と協同して行なわれるものであり，クマ狩に随行した人々だけの仕事というものではない。前節でも述べたように，クマ祭用の儀礼的な集団狩猟に参加した狩人達は特に英雄扱いはされず，ニマトの慣習のため，クマの毛皮や肉に対して特権があるわけではない。

クマ穴発見者とニマクに従ってクマ猟に行く狩人の選出は特に何の記述もない。そのため，彼らのクマ穴発見者やニマクとの関係は不明であるが，同じ集落内の友人達で，狩の腕前，経験とも十分な人々の中から選出されると考えておくのが無難であろう。

4. 長　老　達

集落の中で人々の尊敬を集めている老人達は，その経験と知識を活用してクマ祭の準備と儀礼の進行を指導，監督し，食事に際しては最優先にされる権利を持つ。

老人達の間では一般の人々の間に見られる男女によるクマへの禁忌の違いはない。一般の女性はクマの頭部に触れてはいけないし，まして頭部の肉や脳を食べることは許されない。しかし，尊敬を集めている老婦人は，アルダノ=ウチュル地方の事例にもあるように，長老たちとともに食前の儀礼を行ない，脂肪料理を優先的に食べることができる [Василевич　1971: 164]。また，やはり前節で紹介した事例にもあるように，スィム，オレクマ，ウチュル，ウルミなどの地方ではクマの頭の皮は最年長の婦人が剝ぎとるといわれている [Василевич　1971: 161]。

エヴェンキでは老人を敬うことは家族，集落，氏族の若い者達の義務である。そし

て敬われるべき老人には，女性としての生理的な営みを終えてしまった老婦人も含まれる。そうした老人達への配慮がクマ祭でも厳格に守られている。

5. 一般の参加者

クマ祭の饗宴に加わり，クマの肉を腹一杯食べるのに制限や資格のようなものはない。かつては共に狩猟活動，遊牧活動を行なう者だけに限られていたという記述もあるが [Василевич 1971: 161]，レーヴィンやヴァシーリェヴィチ，トゥゴルコフらの調査では集落にいる者は全員参加できるとされている。中には偶然祭の場に居合わせた者でも，異民族の者でも参加できる場合があったようである [トゥゴルコフ 1981: 174]。

クマ祭の饗宴の恩恵は直接参加した者だけでなく，参加しなかった近隣の親族たちにまで及ぶ。祭で残った肉その他の食物が参加者に分配され，さらに彼らの親族の者にまでお裾分けされるからである。

参加者の果たす仕事は饗宴の準備である。男女のクマ肉への禁忌の違いと分業とによって仕事が分かれており，男性は頭部を調理し，女性は他の肉を調理し，食べる。饗宴の準備の間，若者達は伝統的な踊りに酔いしれ，宴の中では人々は黙々と肉を食べ，時々占いのようなことを行なう。

エヴェンキ族のクマ祭は，その集落の構成と狩猟慣習を反映して，その場に居合わせた者全員が参加でき，主宰者が不明であるという特徴を反映して，誰もが，長老達の指示や日常の慣習に従いながら，自主的に祭を作り上げている。

Ⅳ. 結　　論

以上のように，ヴァシーリェヴィチが収集，整理した資料に基づいて，エヴェンキ族のクマ祭に参加する5種類の人々の役割，地位，その人々の行動に現われている諸規則について検討した結果，以下のような結論が得られた（前節の中でニマクに関する記述が長大になったのは，これまで論じたように，これが祭の中で最も多くの役割を演じ，いくつかの重要な規則，慣習と密接に関係していたからである）。

1) まず，祭の中核をなす狩猟遊牧集団や集落は，単一の氏族の成員から成るのを原則とするのではなく，様々な氏族の出身者によって，地域的，経済的基盤の上に構成されているのを常としていた。

2）したがって，それらの集団，集落の中では，秩序を保ち，相互に助け合って生活するために，氏族制度に基づく諸規律だけでなく，それに拘束されない，狩人，牧人どうしの関係を規定する狩猟，遊牧慣習が重要な機能を果たしていた。

3）ニマクに妻の兄弟を選ぶように，狩猟慣習の中にも親族構造の一端である wife giver の集団の wife taker の集団に対する優位性が顕われていた。

4）そのほか，年長者への敬意，男女の分業と禁忌などの一般的な社会慣習がクマ祭でも守られていた。

5）そして，以上の社会現象を反映していることから，エヴェンキ族のクマ祭は氏族の祭ではなく，共に住み，共に活動する人々の祭であり，土地との結びつきを持つということがいえる。

これらの結論により，エヴェンキ社会の全体像を描き出すためには，シロコゴロフが入念に行なった氏族制度の解明だけでなく，狩猟，遊牧，漁労等の日常活動のための非氏族的な諸慣習，諸規律の整理が必要であることが判明した。エヴェンキ族の集落や狩猟遊牧集団がすでに集団化以前から非氏族的に構成されていたということは，ニクリーシン Никульшин が1939年の著作で主張して以来，レーヴィン，ドルギフ，グールヴィチらによって支持されてきた[Левин и Долгих　1951；Гурвич　1970]。しかし，彼らもまた「氏族社会から地域社会への変化」という枠組の中でシベリア諸民族の社会を把らえており，結局は狩猟採集経済下での氏族を基盤とした狩猟集団の存在を前提にした議論にとどまっている。そして，シベリア諸民族については，実際の狩猟集団と氏族のような単系出自集団との関係の精密な分析はまだなされてはいない。

フィールドワークに基づく一次資料が得難く，また革命後の激しい社会変動によってたとえ調査が行なわれていても成果を期待できない現在，こうした問題を追求するには，18世紀以来の文献に頼らざるを得ない。しかし，それらを丹念に調べ上げ，そこから狩猟，遊牧，漁労などの諸活動に関する慣習や規則を取り出し，整理することができれば，シロコゴロフらが十分研究し尽くさなかった部分を埋め合わせることができ，さらにはエヴェンキ社会のより正確な全体像を描くことができるはずである。こうしたことが，今後のエヴェンキ社会（またはツングース社会）研究の課題であろう。

謝　　辞

本稿は昭和57年度，58年度にわたって行なわれた共同研究「熊送り儀礼の比較研究――アイヌを中心として――」の成果報告の一つである。当研究会を主催された国立民族学博物館助教授大

塚和義先生，草稿に目を通して貴重な助言を下さった東京大学教授大林太良先生，その他研究会での発表，討論を通じて貴重な資料，意見を下さった共同研究員の方々に深く謝意を表したい。

文　献

Black, Lydia

1973 The Nivkh (Gilyak) of Sakhalin and the Lower Amur. *Arctic Anthropology* 5(1): 1–110, The University of Wisconsin Press.

Castrén, M. A.

1856 *Grundzüge einen Tungusischen Sprachhehre nebst Kurzen Wörterverzeichniss*. St. Petersburg: Buchdr. der K. Akad. der Wissenschaften.

Гурвич, И.С.

1960 Эвены камчатской области. *Труды Института Этнографии* 56: 63–91.

1970 Соседская община и производственные объединения малых народов Севера. И.С. Гурвич и Б.О. Долгих (от. ред.), *Общественный строй у народов Северной Сибири*, Москва:Наука, pp. 384–417.

黒田信一郎

1974 「ギリヤーク社会の形成原理(1)——Л. Я. Штернберг の記述を中心とする素描——」『北方文化研究』8: 29–44。

1975 「ギリヤーク社会の形成原理(2)——象徴体系の構造論的解読——」『北方文化研究』9: 29–60。

1980 「トゥングース語系諸族の親族体系覚書（一）」『北方文化研究』13: 1–22。

Hallowell, A. Irving

1926 Bear Ceremonialism in the Northern Hemisphere. *American Anthropologist* 28(1): 2–175.

Левин, М.Г.

1936 Эвенки северного Прибайкарья. *Советская Этнография* 2: 71–78.

Левин, М.Г. и Б.О. Долгих

1951 Переход от родоплеменных связей к территориальным в истории народов северной Сибири. *Труды Института Этнографии* 14: 95–101.

レヴィ=ストロース，クロード (Lévi-Strauss C.)

1977 『親族の基本構造』馬淵東一他監訳　番町書房。(1949, *Les structures élémentaires de la parenté*.)

Попова, У.Г.

1981 *Эвены магаданской области*. Очерки истории хозяйства и культуры эвенов Охотского побережья 1917–1977 гг., Москва: Наука.

Рычков, К.

1922 Енисейские тунгусы. *Землеведение* 1922 (1–4): 107–149.

シロコゴロフ，S. M.

1941 『北方ツングースの社会構成』川久保悌郎，田中克己共訳　岩波書店。

Shirokogoroff, S. M.

1935 *Psychomental Complex of the Tungus*. London Kegan Paul, Trench, Trubner & Co., LTD.

Штернберг, Л.Я.

1933 *Гиляки, Орочи, Гольды, Негидалы, Айны : статьи и материалы*. Дальгиз, Хабаровск.

Сравнительный словарь тунгуссо-маньчжурских языков

1975 *Сравнительный словарь тчнгуссо-маньчжурских языков* В.И. Цинциус (от.ред.), Ленинград.

Sumner, W. G.

1901 The Yakuts. (Abridged from the Russian of Sieroshevski, *Yakuty* published by the Imperial Russian Geographical Society, St. Petersburg 1896.) *The Journal of the Anthropological Institute of Great Britain and Ireland,* pp. 65–100.

Титов, Е.И.

1926 *Тунгусско-Русский Словарь*: издание Читинского Краевого Государственного Музея им, А, К, Кузнецова, Иркутск.

Tokarev, S. A. and I. S. Gurvich

1964 The Yakuts. In M. G. Levin and L. P. Potapov (eds.), S. P. Dunn (trans. and ed.), *The Peoples of Siberia,* The University of Chicago Press, pp. 243–304.

Туголков, В.А.

1963 Хантайские Эвенки (очерк истории, хозяйства и культуры). *Труды Института Этнографии* 84: 5–32.

トゥゴルコフ, B. A.

1981 『トナカイに乗った狩人たち――北方ツングース民族誌――』斎藤晨二訳　刀水書房。

Вайнштейн, С. И.

1970 Проблема происхождения оленеводства в Евразии (I Саянский очаг одомашнивания оленя). *Советская Этнография* 6: 3–14.

1971 Проблема происхождения оленеводства в Евразии (II Роль саянского очага в распространении оленеводства в Евразии). *Советская Этнография* 5: 37–53.

Василевич, Г.М.

1958 *Эвенкийско-Русский Словарь*. Москва:Наука.

1969 *Эвенки*: историко-этнографические очерки (XVIII-начало XX в.), Ленинград: Наука.

1971 О культе медведя у эвенков. *Сборник Музея Антропологии и Этнографии*, Наука 27: 152–169.

Васильев, Б.А.

1948 Медвежий праздник. *Советская Этнография* 4: 78–104.

Zolotarev, A. M.

1937 The bear festival of the Olcha. *American Anthropologist* 39(1): 113-130.